

パネルディスカッション「メディア状況の変化とメディア・リテラシー」

午後のパネルディスカッションでは、西村寿子（FCT メディア・リテラシー研究所理事）が司会進行をつとめ、まず阿部潔氏（関西学院大学教授）、森達也氏（映画監督／ドキュメンタリー作家）、宮崎寿子（FCT メディア・リテラシー研究所所長）の問題提起がおこなわれた。以下、問題提起と引き続いて行われたディスカッションを要約してお伝えする。

●メディア状況の変化をどうみるか／阿部潔氏

バッキンガム先生からはデジタルメディアについてのお話があったが、私は地上波テレビの状況についてお話する。テレビがひどいということが近年特に言われているが、だとすればそのことがどのような問題を孕んでいるのかをきちんとみるのが大事だと思う。

多くの人が比較的簡単にアクセス可能なメディアであるテレビは、インターネットが普及した今でも「基幹メディア」として期待され、より多くの公共的な役割を担っているし、依然として大きな力をもっている。最近顕著になっている傾向として、マスを対象とするマスメディアが、最大公約数的な情報提供をすることから逃れられていない点が指摘できる。そこでは物事を丁寧に説明し、論評し、「意味の理解」を促していくのではなく、より多くの人を引きつけるための手段として、こんなに怖いとか、こんなに面白いという形で情緒的・感情的な次元に訴えて「情緒の共有」をしようとする。そういった感動や恐怖といった、共感を喚起するためにつくられる広い意味でのコトバ、表現というのは「絵になる」わかりやすさを目指すため、貧困化、凡庸化していく。

ここで問題にしたいのは、「共感する私たち」を作り上げ、同時にその共感する私たちに訴えかけようとするマスメディアが、「私たち」とは違う「あの人たち」をつくり出していることだ。例えば青少年犯罪者や変質者、「外国人」といった、「わかりあえないあの人たち」を描き出すことで、そういう人たちとは違う「私たち」がつくりあげられる。実は「あの人たち」と「私たち」の境界というのは根拠のないものなのだが、それはメディアによって恣意的、暴力的につくられる。そうした境界づけは「共感する私たち」からなる「共感の共同体」をつくるためには不可欠になってしまっている。

無責任なまでに情緒的に被害者に同一化し加害者を悪魔化する現在の犯罪報道にみられるように、メディアは「あいつら」を次々に見つけ出して否定的に描き出していかねばならない。そこでは終わることなく不安が喚起されていく。それによって安全や安心は全然高まってはならず、本来考えなければいけない不安の実像は隠蔽される。例えば夜道で一番身近で危険な無灯火の自転車ではなく、通り魔やひったくりばかりをメディアで取り上げているのはバランスが良いとはいえない。本当の意味で私たちの日常生活の安全安心を考えて行くときには、もっと別の切り口があるのではないかと。

基幹メディアとして機能するためにマスメディアは何をしなければいけないのか。やはり感覚だけに頼るのではない、マスメディアだからこそのコトバを用いた表現が必要だ。もうひとつは現実社会の諸問題の複雑な背景に迫るという、安逸でない「めんどくさい」ことを敢えて実践していくということが求められるのではないかと。筋論かもしれないが、それほどまでに今のマスメディアはマスであることに頼り切ってしまい、「メディアがすべきこと」を問うことができなくなってしまっているのではないかと思う。

●表現者とメディア・リテラシー／森達也氏

私はかつてテレビディレクターとして、報道系のドキュメンタリーを制作していた。1995年にオウム真理教の地下鉄サリン事件が起きて、そこで信者のドキュメンタリーを撮り始めた。しかし1時間番組として放送される予定だったドキュメンタリーは、中止命令が出てしまい、それ以降他のどの局に企画を持って行っても断られた。最終的には自主制作映画というかたち（『A』）になった。なぜ僕のドキュメンタリーがマスメディアから排除されたか。映像を見た方の感想で一番多いのが、信者たちがあんなに普通で善良で純情だとは思わなかった、というものだ。マスメディアがオウムを語るときの、凶暴な殺人集団か洗脳されたロボット集団というレトリックから外れたものを、マスメディアは提示できないし、相容れない。メディアは視聴率や発行部数によってコントロールされる。オウムの信者が普通であるとしたら、メディアやスポンサーに抗議が来るかもしれない。信者たちが普通だとなった場合、視聴者にとっては自分たちと彼らが変わらないということになってしまう。それは認めたくないことだ。

どこかで差別化、差異化する構図はオウム以降、この社会に基調低音として流れているような気がする。善と悪の二元化、他者に対する恐怖と不安の構造のなかで日本社会がどんどん変わっていった。どうすれば安心できるかという、不安や恐怖の対象にしている「悪い人たち」についてももう少し多角的に知ればいい。北朝鮮の工作員やアルカイダのテロリストに実際に会うことは普通はできないから、メディアが代わりに教えてくればいいが、なかなかそうはならない。不思議なもので人間は不安と恐怖の構図にはまると、より不安や恐怖を求め、喚起される。メディアは市場原理に従っていくうちに気づいたら不安や恐怖を煽っている。二項対立、二元化を皆が好むなかで、メディアは煽ることで利益を得るという構造から逃れないといけない。

「納豆問題」以降、メディア・リテラシーという言葉が多少皆が口にするようになった。リテラシーとは元々文字の読み書きのこと。映像と音は、識字能力がなくてもわかる。これは画期的なことで、世界は良くも変わったが、プロパガンダを可能にしたように悪くも変わった。かつてテレビの制作側にいた頃は、メディアがとてつもない負の領域をもっていう意識は全く持っていなかったし、今、仕事している人たちも同じだろう。

メディア・リテラシーを、メディアにだまされないこと、メディアの嘘を見抜くことと訳する人がいるが、そもそも映像というものは嘘であり、それは無理だ。ではどうすればいいか。だまされないのは無理としても、二項対立ではなく、グラデーションになっている部分に視点をずらす。今、テレビや新聞で見ているのはあくまである誰かの視点なのだから、視点を換えれば見えるものがあるはずだという思いを常に持ちながら、情報に接することだ。そうすればだいぶ変わる。世界とはそう捨てたものではないという気分になるし、これは「くせ」になるからおすすめる。

●メディア・リテラシーと市民の役割／宮崎寿子

FCTは25周年のとき、ICTをいかに利用して市民間のコミュニケーションを活性化させていくか、参加的な民主主義構築のために何をしていくか、という議論が必要だと指摘した。5年を経た今、果たして議論の場が活性化したと言えるかどうか。

実際に社会を変えていくためには、私たち一人ひとりが社会や政治について具体的に思考を巡らしていくことが必要だ。ウェブを利用すれば時間と場所を選ばずに議論ができると思うが、実際には市民が ICT を利用して社会について話し合うというのはあまりみられないのが現状だと思う。この日本社会では、自分たちの周囲の環境や政治や社会について話し合うための仕組みや仕掛けに対するアイデアが乏しいのではないか。ウェブだけでなく、市民の話し合いの場を具体的にどういうふうに形成していくかを真剣に模索していく必要がある。

FCTは、テレビをはじめあらゆるメディアを巡る問題について、皆が社会を生きる一人ひとりの市民として対等に話し合う広場として1977年に創設された。それ以来、メディアを社会的文脈でクリティカルに読み解き、実証的なデータをもとに皆で社会的に発言しようという活動を継続しておこなってきた。メディアが環境化するなかで、このような活動に対する要請が広く認識されるようになっていったと思う。国内でのさまざまなメディア・リテラシーの実践活動や、国際会議への出席等海外との交流もおこなっている。

今最も重要な課題は私たち市民が理想とするメディアとは何か、メディア社会環境とはどういうものか、イメージして積極的に話し合っていくことだ。その上でメディア・リテラシーの観点から、表現の自由とは、誰のための、何のための自由なのかを再考する必要がある。そのためにはメディアの問題が私たち一人ひとりのコミュニケーションする権利に強く関わるもので、メディアを通して私たちが権利を確保しているということを意識する必要がある。

私がメディア・リテラシーの活動をしていて感じるのは、メディアが提起する問題だけではなく、私たち市民が積極的に問題を提起できる場を確保していく必要があるということだ。そういう文化的社会的土壌がない場合には難しいことかもしれないが、市民の話し合いの場のきっかけ作りをするときにメディア・リテラシーの活動は非常に有効ではないかと考える。メディア・リテラシーがもう少し広がって、メディアだけでなく社会をも変える力になれば、と考えている。

●全体討論

各氏による問題提起のあと、基調講演の内容もふまえて、会場を含めた全体討論が行われた。その内容を以下に要約する。

会場：日本ではデジタルメディア以前に従来のメディアについてもメディア・リテラシー教育が定着していない。どう定着させていくか。また図書館の役割は。

バッキンガム：学校でのメディア・リテラシー教育は、様々なところで戦い、機を見て先に進む必要があるという意味でゲリラ戦のようなもの。メディア・リテラシー教育を根付かせるのは草の根運動であり、教師自身が変化の担い手になることが必要だ。一方で他の組織や放送関係者とのコラボレーションも重要だ。親やコミュニティに働きかけ、そこから学校に働きかけていくこともできる。メディア・リテラシーを奨励する流れが生まれてきている規制当局者とも手を組む必要がある。図書館も手を組む相手だ。図書館はテクノロジー面でも入手可能な情報の面でも大きく変わりつつあり、単に本を置く所ではなく情

報の場所を指し示す場となっている。司書も、情報を批判的に評価するメディア・リテラシーの教育者という観点が出てきている。

会場：

- ・メディアで異質なものを排除する傾向が強まっているという提起に賛成だが、それを防ぐ「視点をずらした」番組があまりにも少なく、森さんの『A』もなかなか見られない。YouTube等の技術を使うなどしてもっと身近に見ることはできないか。

- ・Web やマスメディアでナショナリズムが語られ、少数者の差別があったりする。不安な時代に自分たちのアイデンティティを求めたいという背景があり、市民自身がそういう情報を求め発信したりしている。企業や政府やマスコミにだまされないというだけでないスタンスの必要性についてどう考えるか。

- ・情報の主体的な入手についてだが、自分たちが暮らす地域の情報の入手がとても難しい。市民も地域の政治や経済などに無関心無知識だったりする。どのような仕組みづくりが必要なのか。

森：自分の作品はYouTubeで見てもらえるし、『A』『A2』は反対があったがビデオレンタルできるようになった。ただ番組をつくる側が視点をずらすことはなかなかできない。見る側が、こういう見方があるんじゃないか、とイマジネーションを働かせれば普通の番組を見ていると視点をずらすことができる。

阿部：公共図書館や大学図書館に注文を出すことも重要だ。全ての図書館に入ればかなりの数になるし、可能性がある。YouTubeも面白いが、著作権や技術の点で課題がある。視点をずらす作品を見る機会を増やすことを我々がそれぞれの場所でやる必要がある。

ナショナリズムについては、一方的にだますだまされるではすまないある種の共謀関係がある。ネット等でなされる主張は論理的で根拠のある信条や主義主張ではなく、気分的情緒的なはけ口になっている。だましている人とだまされている人に明確な区分がない。建前ではわかっている、実際に自分の身の周りのこととなると人を排除することに無神経になれてしまうというところを考えていく必要がある。

地域に関しては確かに情報がなくて困る。それが低い投票率に結びついていると思う。待っていてもだめで、党派性のない組織や集団が、身近な問題について討論会を開いたり公開質問状をつくったり、学生を巻き込んでいくなどしてはどうか。

会場

- ・秋田でメディア・リテラシーに取り組んでいる。できるわけがないと思っていたが、案ずるより生むが易しで、ニュースの比較等をやってみたら面白くなった。4年目だが議員、研究者、教員、メディア出身者等多様な会員がいて、草の根運動でのコラボレーションの重要性を痛感している。

- ・徳島で高校3年生の「情報」という教科でメディア・リテラシーに取り組んでいる。実際やってみるとこれまでの日本の教育のやり方と違ってむずかしい。学校外の生活の重要性の話があったが、高校生が依存しているケータイを、教育の中から排除するだけでなく

もっと实际的に扱っていききたい。

●まとめ

森：放牧する羊の群れに山羊を一頭混ぜるように、均質を好む日本にも異物が必要。でも山羊に引っ張られるだけではだめだ。メディアだけでも私たちだけでもなく、互いに影響しあって今の状況をつくっている。自分たちが変わればメディアも変わる。

阿部：われわれはメディアに対して物事をすっきりさせてほしいという期待をしているところがある。それだけではあまりにまずい。わからないこと、わからない人があるのが社会の多様性だ。わかりあえるというだけではなく、わからないけど関わっていくというコミュニケーション文化をつくっていかないといけない。わからないままでも伝える覚悟、技法、ゲリラ的にそういうものをうちたてていく戦略が必要ではないか。

バッキンガム：この30年で市民は変わってきたらどうか。イギリスでは市民と消費者を同一のものとする見方がある。商業化された社会のなかでの公共性はどうなるのか。特に若者は従来の政治的社会的な活動には疎外感を持っている。市民的な活動についての新しい認識が必要だ。ニューメディアは新しい市民性についての答えを提供するのか。ネットによる差別等、様々な矛盾があるわけで、インターネットは魔法の特効薬ではない。非常に大事なものは批評性、批判性だ。クリティカルな対話が必要だし、平等なダイアログを確保していくことも重要だ。

宮崎：クリティカルな対話が必要ということだったが、この場にも多くの方が集まってくださった。集まった方たちがまたメディア・リテラシーの考え方を伝えてほしい。

(まとめ 田島知之 FCT メディア・リテラシー研究所理事)